

若木 2021 年 2 月号より続きます。飯島先生は内村鑑三の弟子である山本泰次郎先生に師事しました。内村先生の孫弟子になります。この師弟関係のすばらしさは、聖書信仰だけではなく英文学や詩作においても共通していることにあります。

内村先生の詩は、余滴 2 月 7 日付。飯島先生は若木 21 年 2 月号にあります。その中で、ウルマンの『青春』という詩に触れています。全文は無理ですが、前半だけでもご紹介させていただきます。

《青 春》 原作 サミエル・ウルマン
邦訳 岡田 義夫

青春とは人生のある期間を言うのではなく、心の様相を言うのだ。

優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、

安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときに初めて老いが来る。

歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

苦悶や狐疑や、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、

精気ある魂をも芥に帰せしめてしまう。

年は七十であろうと十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。

日く、驚異への愛慕心、空にきらめく星辰、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰、

事に処する剛毅な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探求心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる、人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる、

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美と喜び、勇気と壮大、そして偉力の靈感を受ける限り、

人の若さは失われない。これらの靈感が絶え、悲嘆の白雪が人の心の奥までも蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを堅くとぎすに至れば、この時にこそ人は全く老いて、神の憐れみを乞うる他はなくなる。